

同一性の諸問題

横路 佳幸

同一性は単純である。あらゆるものは自身と同一で、自身以外のものと同一であることなどありえない。それゆえ、この意味では同一性はまったく問題とにならない。

おそらくこうした説明は、直観的にも形式的にも正しいように思われる。同一性そのものを取り上げて論じる機会がこれまでそれほど多くなかったのも、そのためかもしれない。しかし、本稿における私の目的は、そのような説明とは独立に、同一性そのものがそれだけで立派な哲学的な議論の対象である可能性を示すことにある。より具体的には、同一性という関係が存在論的にどういった種類の関係なのか明らかではないという問題を提起することで、私は同一性とその意味では問題となることを主張するつもりである。たしかにそれは解決を与えない問題の提起にすぎないが、同一性が様々な哲学的問題とともに論じられる以上、同一性に関する諸問題はより広い射程を持つ議論となる。

1. 準備

同一性とは何だろうか。そもそもこの問いに答えないと、問題を提起することすらできない。そのため、ここでは次の三つの特徴をあげておくことでその答えとしたい。一つ目は、同一性が反射的で対称的で推移的な関係だという点である。二つ目は、同一性を二つの自由変項を伴う解放文で表現するなら、「 $x=y$ 」という形式を持つ点である。三つ目は、同一性が同一者不可識別の原理(Principle of the Indiscernibility of Identicals)に従うという点である。もちろん、これらの特徴があらゆる哲学者から普遍的な支持を得ているわけでは決してないが¹、これら三つの特徴を前提としたうえで、本稿では同一性について語ることにする。

同一性の特徴を確認したところで、次は一つ目の特徴で同一性もその一種とされる、関係(relation)そのものをルイスの提案に従って整理しよう。この関係の分類こそが、同一性の諸問題と密接に関わる。ルイスによれば、関係は次のように分類することが可能である(なお、 a と b は個体定項の上を走るメタ言語的な変項で、 R は関係の上を走るメタ言語的な変項とする)。

- (i) ある関係 R が内的(internal)であるのは次のとき、かつ次のときに限る。すなわち、 a と a^* 、 b と b^* がそれぞれ複製であるときはつねに、 $\langle a, b \rangle$ と $\langle a^*, b^* \rangle$ の両方が関係 R にあるか、もしくは両方が R にないかのいずれかである。
- (ii) ある関係 R が内在的(intrinsic)であるのは次のとき、かつ次のときに限る。すなわち、 $\langle a, b \rangle$ と $\langle a^*, b^* \rangle$ が複製であるときはつねに、それら両方が関係 R にあるか、もしくは両方が R にないかのいずれかである。²

それぞれを順に見る前に、一つだけ強調しておかねばならない点がある。それは(i)と(ii)に登場する「複製(duplication)」についてである。ルイスによれば、複製は性質における内在性と相互に定義することができ、「複製とは内在的性質を共有するということで、また内在的性質とは複製の間で決して異なることのない性質にほかならない」³とされる。具体例で考えてみよう。たとえば、いま富士山の複製である富士山*を作ったとする。このとき、富士山も富士山*もともに、おなじ高さや質量などを共有しているので、これらの性質は内在的な性質だとみなされる。他方、富士山は世界文化遺産の一つだが、富士山*はいま作られたばかりなのだからそうした性質を持たないだろう。よって、世界文化遺産の一つであるという性質は外在的な性質である。このように、複製といっても、それらがあらゆる性質を共有するわけではないことに留意せねばならない。

では、まず(i)から見ていくことにしよう。ルイスによって、(i)は関係 R がその関係項 a と b それぞれの内在的性質にスーパーヴィーンする(supervene)と言い換えられていることからわかるように、内的関係は、 a と b の内在的性質の間に違いがなければ、 R の成立にも違いがないことを要求する。これも例で考えたほうがわかりやすい。たとえば、背が高いという関係は、(i)に鑑みれば

内的な関係である。というのも、その関係項それぞれの身長に違いがない限り、背が高いという関係においてもやはり違いはありえないからである。言い換えれば、この関係は関係項の身長という内在的性質のみによって成立する。もしくは、複製とは内在的性質を共有することなので、ある関係項の間に背が高いという関係が成り立つなら、それぞれの複製の間にも必ずその関係が成り立つと言ってもよい。

もう一つの分類(ii)に移ろう。〈 a, b 〉と〈 a^*, b^* 〉が複製であるというのは、 a と a^* 、 b と b^* のそれぞれが内在的性質を共有し、さらに a と b の間の内在的関係が a^* と b^* の間にも成立するとき、かつそのときに限ることにほかならない。これは、(i)に対して(ii)が関係項の順序対に対しより強い要求を課すことを示す。たとえば、38万キロメートル離れているという関係は、内的関係ではないにもかかわらず、内在的な関係である。地球と月を例にとろう。(i)によれば、この関係が内的でないのは、地球の複製である地球*と月の複製である月*が、内在的性質を共有するかどうかに関係なく、互いに38万キロメートルよりも離れていることが可能だからである。だが、(ii)によれば、順序対〈地球、月〉と〈地球*、月*〉が複製になっている場合では、両者の対はおなじ距離の関係に立たねばならない。38万キロメートル離れているという関係は、月と地球の間の内在的関係以外の外在的な事物にまったく依存しないからである。したがって、内在的関係とは、関係項の対の間に違いがなければ、外在的にはどのようなようになっていようと、つねに成り立つ関係なのである。

このように、(i)と(ii)に従えば、距離の関係は内的でなくかつ内在的な関係だとわかるが、ここで注意すべきは、おなじ所有者に属するという関係である。この関係は、関係項の内在的性質にスーパーヴィーンしないので内的ではないし、さらに所有者や所有権という制度にとって必要な事物といった、関係項以外の存在者である外在的なものに依存するので内在的でもない。真にするもの(truthmaker)と関連させて言えば、この関係を含む命題は、その関係項の内在的性質だけでなく、所有者などといった外在的な存在者によってはじめて真になるのである。このため、伝統的に内的ではないが内在的な距離の関係が「外的関係(external relation)」と呼ばれてきたのに対し、おなじ所有者に属するという関係は内的でも外的でもないとされる。このことは、内的関係ではないからといっ

て、すぐさま外的な関係だとは限らないということの意味している。つまり、外的関係は内在的な関係であることを要求するのである。

駆け足ではあったが、以上で同一性に関する諸問題を提起する準備は整ったことになる。次節と次々節では、実際にこうした (i) と (ii) の区別という道具立てを用いながら、同一性がどのように分類されるのか、もしくは分類されることにどのような議論がありうるのかを検討することにしよう。

2. 内的か否か

さて、同一性は内的関係なのだろうか。私が本節で問いたい問題はこれである。換言すれば、関係項の内在的性質の間に違いがなければ、同一性関係が成立するかどうかにおいても違いがないと言えるのだろうか。

実は、この問いに答えることはそれほど難しくない。というのも、同一性が内的であることに対する反例が存在するからである。関係項のすべての内在的性質の間に違いがないにもかかわらず、同一性関係の間に違いがあるとしても何の不思議もない。たとえば、互いにまったく内在的性質において識別できないような二つの球を考えてみよう。その二つの球は、形状や大きさ、重さなどあらゆる内在的性質を共有している——つまり完璧な複製である——のだが、数的には決して同一ではない。これは明らかに、同一性が関係項の内在的性質へスーパーヴィーンしないことを示している⁴。ある球 w とある球 w^* が複製で、かつある球 z とある球 z^* が複製であるとき、 w と z の間には同一性関係が成り立つ、すなわち数的に同一なのだとしても、いまの例の通り、 w^* と z^* が数的に同一でないのはまったく可能である。したがって、関係項の内在的性質の間に違いがなければ、同一性の間に違いがありうるので、同一性は内的関係ではないと主張することができる。少なくとも、何らかの形而上学的立場を前提としないのであれば、そう主張すべきだろう⁵。

もしこの議論が正しいとすれば、それは一体何を示唆するだろうか⁶。一般に、内的関係は関係項の内在的性質に依存するために、しばしば「存在論的にタダで手に入るもの (ontological free lunch)」⁷ と呼ばれる。これの意味するところは、内的関係の真にするものが、ほかならぬその関係項だけで済み、関係とい

う普遍者をさらに要求しなくてよいということである。先ほどの例で言えば、太郎は花子より背が高いという命題に対する真にするものとして必要なのは、太郎と花子の内在的性質だけだとされる。したがって、先ほど内的関係ではないとされた同一性は、背が高いという関係と違って、存在論的にタダで手に入るものではないことになるだろう。宵の明星は明けの明星と同一であるという命題に対して真にするものは、金星の内在的性質だけでは不十分なのである。

だとしたら、同一性は外的関係、すなわち「存在論的に重要な関係」⁸なのだろうか。そうとも限らない。というのも、前節で示した通り、おなじ所有者に属するという関係と類比的という可能性がまだ残っているからである。外的な存在者が入り込む余地を残している以上、同一性がそれ自体で存在論的に重要だとも限らないのである。では、同一性は外的でも内的関係でもない、もしくは外的関係のうちどちらなのだろうか。この問いに答えを出すには、外的関係の特徴により、同一性が内在的かどうかを明らかにせねばならない。

3. 内在的か否か

本節で検討すべき問題は、同一性が内在的な関係かどうかである。だが、内的かどうかの問い同様、一見するとこの問いもそれほど哲学的に問題があるようには思われない。というのも、直観的には明らかに内在的だからである。同一性は、その関係項以外の外的な要因にまったく左右されない。つまり、関係項の順序対とその複製 $\langle a, b \rangle$ と $\langle a^*, b^* \rangle$ の間に違いがなければ、必ず同一性は両方の対の間に成立するのである。たとえば、宵の明星が明けの明星と同一であるという命題を考えると、それを真にするものとして、宵の明星と明けの明星の内在的性質と両者の間に成立する内在的関係以外はまったく必要ないだろう。同一性は関係項の順序対というローカルな内在的性質および関係を要求するだけであり、この場合、金星以外の事物はまったくお呼びでないのである。

このように、同一性についての内在主義者の説明は一定の説得力を持っている。しかしながら、素朴な直観とは裏腹に、内在的関係としての同一性が何の問題も抱えていないわけではない。以下で見るように、むしろそこには二つの困難が存在する。順に見ていくことにしよう。

同一性を内在的な関係とみなす第一の問題は、そのようにみなす理由が明らかではないことである。なぜ同一性は内在的な関係だと言えるのだろうか。外在的な関係としての同一性を認めないでおくには、直観に頼るのではない適切な理由が必要である。私の考えによれば、ここで同一性についての内在主義者は二つの選択肢を用意することができる。そのうちの二つ目の提案によれば、同一性の内在性は「このもの性(thisness)」によって説明される⁹。このもの性は、特定の対象によってしか例化されないもので、同一性のローカルな内在性をうまく解き明かしてくれるだろう。たとえば、バットマンが自身と同一であることは、外在的な事情がどうあれ——バットマンの偽物がいようと——「バットマン性」のおかげで必ず成立すると、同一性についてこのもの性を支持する者は主張しうる。つまり、同一性関係は、関係項の間に成立するこのもの性によって完全に決定されるために、内在的な関係たりうるのである。

だが、このもの性は明らかに存在論的に余剰な性質である。たしかに、同一性関係の内在性を保持しうる点は直観に適うように思われるが、それを分析しようとした途端、このもの性といったオッカムの剃刀を侵犯するような存在者を要請せざるをえなくなるのは、あまり好ましいことではない。さらに、存在するすべてのものがこのもの性を持っているとはとうてい信じがたいので、多くの哲学者は手放しにはその性質を認めないだろう。このように、同一性が内在的な関係であることをこのもの性で説明しようとする者は、このもの性が存在するのかどうかを新たな係争点として背負い込まねばならない¹⁰。

このもの性を用いずに説明するとすれば、同一性の内在性はどのような概念を用いて説明すべきだろうか。いや、そもそも他の新しい概念を持ち込むよりも次のような説明で切り抜けようとする方が賢明なのかもしれない。すなわち、同一性の事実は「裸の事実(brute fact)」であって、同一性はそれ以上根拠を持たないプリミティブな関係であると主張することである¹¹。これが、同一性の内在性を説明する二つ目の提案である。たとえば、〈宵の明星、明けの明星〉と〈宵の明星*、明けの明星*〉が互いに複製であるとき、その両者の対の間に必ず同一性関係が成り立つのは、説明不要の事態だとこの立場に立つ者なら言うだろう。それによれば、内在的な関係としての同一性はプリミティブな関係でもあるのだから、それ以上その根拠を問うのは不可能なのである。こうした態度は、おそ

らく我々の直観にも適合する。実際、「なぜ金星は金星と同一と言えるのか」と問われたとしても、外在的な要因が関係してくるわけではないのは間違いないが、それが同一性関係にある以上の根拠を提示するのは困難だからである。

この提案はそれほど悪くないと私は思う。そうだからこそ、実際同一性に対してこれまで疑いの目が向けられなかったのかもしれない。だが、外在的な関係を認める立場に対してもフェアでいるならば、この提案も決して問題を抱えていないわけではない。同一性をプリミティブな関係だと認めるこうした提案は、かりに同一性が内在的な関係であることを保証するとしても、そうした事態を再び謎で包み込むことに等しい。これは、デラロックが二十個の球ケース (20-sphere case) と呼ぶ事態をそれだけでは排除できないという問題を惹起させる。それは次のようなケースである。すなわち、「私の机の上には明らかに一つの球がある。しかし、このケースでは実際には一つの球のみならず、まったくおなじ場所でおなじ時間に二十個もの互いに識別不可能な球があるのである。これらはすべておなじサイズ、形、重さなどを持つ。」¹² もちろん、このようなケースは馬鹿げている。だが、同一性に関する事実を裸の事実とする者にとって、何をもちて対象が自身と同一であるのか明らかではない。強いて言うなら、対象を個別化するのは対象それ自身だということになるので、こうしたケースを適切に排除できない。つまり、彼女は同一性の内在性を説明する義務から逃れたとしても、今度はプリミティブな個別化の可能性を示さない限り、二十個の球ケースを認めかねない事態を招いてしまうのである。これでは結局、一難去ってまた一難だろう。したがってこの提案は、このもの性よりも直観的に正しく思われたが、なぜ同一性は内在的關係なのかという問いに対しては、問いを先送りしただけである¹³。

かくして、このもの性や裸の関係を持ち込んだとしても、同一性の内在性が適切に説明されたとは言い難いことがわかる。もしこのまま同一性についての内在主義者が直観以外に頼るべきものを持たないのだとすれば、彼女は外在的關係としての同一性を否定することができない。現に、人格の同一性や通時的同一性といった、同一性の「仲間」では、まさにその点が論争の一つの的となっていると見ることもできる。つまり、同一性の「仲間」を内在的關係として根拠づける理由を欠き、しかも外在的な関係としての同一性がより多くの問題に対

処できる限り、内在的關係としての同一性の「仲間」は捨て去られるかもしれないのである。それは、同一性自体の内在性にも疑義を呈する契機となりうるだろう。これが、同一性を内在的な関係とみなす第二の問題である。

たとえば、同一性の「仲間」の中でも、特に人格の同一性に関する次のような有名な例を考えてみよう。

私の脳が分割され、その半分がそれぞれ私の二人の双子のきょうだいの身体に移植されたとする。その手術の後生じた二人はそれぞれ自分のことを私だと信じ、私の人生を生きたことを記憶し、あらゆる仕方ですと心理的に継続している。¹⁴

この例の奇妙な点は、もしこの移植手術が私の双子のきょうだいのうちの一人——彼女を *A* と呼ぼう——にしか行われなかったとする例との比較によって浮き彫りとなる。脳移植が一人に対してだけならば、私と *A* は人格的に同一だと言ってよいはずである。だが、もう一人の双子のきょうだい——彼女を *B* と呼ぼう——に対しても脳移植が行われると、途端に事態は不明瞭になる。彼女たちはどちらも自分のことを私だと主張しているので、どちらか一方だけを私と同一だと断じるわけにはいかない。さらに、私の脳の半分が移植されるだけでも私は生き続けられるならば、脳のもう半分が他の身体に移植されたとしても、私は生き続けるはずである。それゆえ、この不明瞭さは「私が消えてしまったから」という可能性にも起因しない。だが本当の問題は、私に何が起こったかを明らかにして事態の不明瞭さを取り除くことにあるのではなく、なぜ移植手術が一人から二人に増えただけで、私と *A* は同一だと言えなくなってしまうのかという疑問に答えねばならないことである。同一性の内在主義者は、何らかの犠牲を払わなければ、この問いに答えを与えることができないだろう¹⁵。同一性を内在的とみなすことは、*B* といった外在的に存在する人格をまったく無関係なものとして扱うことに等しいからである。他方、人格の同一性についての外在主義、たとえば最近接連続者理論 (closest continuer theory) ——それによれば、(1) 時点 t_2 における人格 *b* の性質が、 t_1 における人格 *a* の性質に由来 (stem from) し、それらに因果的に依存する (causally dependent) とき、かつ (2) t_2

において存在する他のどんな人格よりも、人格 b が人格 a と近接した関係にあるとき、かつ(1)と(2)のときに限り、人格 a と人格 b は同一である¹⁶——なら、何の犠牲も払うことなく、いま問題となっている事態を次のように説明することができる。すなわち、私の脳が A にだけしか移植されなかった場合においては、 B が存在しないために私と A は同一である一方で、二人に移植される場合だと、 A とおなじくらいよい候補者である B が存在するために、私と A は同一でなくなってしまうのである。このとき人格の同一性が外在的である理由は、〈私, A 〉と〈私*, A^* 〉が複製だとしても、 B という外在的な存在によって、両方の対の間に人格の同一性が成り立つとは限らないからである。こうした脳分割の例に限らず、内在的な関係としての人格の同一性を捨てる理由となるような反例は他にいくらかも作ることができるだろう。外在的な人格の同一性の可能性は、このようにして示されるのである。

もちろん急いで断っておかねばならないのは、こうした人格の同一性に関する一連の論争が、同一性そのものの内在性を直接に脅かすわけではないということである。人格の同一性や通時的同一性をはじめから同一性の「仲間」と認めない、つまりこれらの論争が同一性自体とは一切関係ないと主張することで、第二の問題はたしかに解消される。しかし、この対処で不十分なのは、まさにそのように同一性とその「仲間」を区別する動機こそ、我々がいま問うている問題だからである。同一性を内在的とみなす直観は非常に強いとしても、それを根拠にして同一性とその「仲間」を区別すると、人格の同一性や通時的同一性も同一性そのものであるというもう一つの直観を犠牲にしてしまうだけではなく、同一性そのものも外在的である可能性を最初から排除する独断に走ることもなる。同一性そのものとその「仲間」について統一的な説明を与えることができるなら、それに越したことはない。そして、人格の同一性が外在的関係とみなされることに正当な理由がある限り、同一性関係自体も外在的である可能性を真剣に検討してみてもよいはずである。直観が信頼に足るものならば、同一性についての外在主義者にもきちんとした言い分があるのである。

以上、二つの問題点から同一性を内在的な関係とすることに問題がないわけではないことが理解されたと思う。私の考えによれば、それらは同一性が内在的ではない決定的な証拠を提供しているとは言えないが、少なくとも内在的か

どうか明らかではない証拠にはなる。しかし、私はまだ同一性についての外在主義を検討していない。かりに同一性関係が外在的だとして、それはいかなる点において外在的なのだろうか。換言すれば、その関係項の対 $\langle a, b \rangle$ と $\langle a^*, b^* \rangle$ が複製であるとき、 a と b の間には同一性が成り立つにもかかわらず、同一性についての外在主義者はどうして a^* と b^* の間には同一性が成立しないと言えるのだろうか。次節では、同一性の外在主義がどのようなものかを見ることにしよう。

4. 外在的な同一性

興味深いことに、同一性が本当に外在的なのかという問題意識には、ヒューム以来その厄介さが指摘されてきた因果関係に関するそれと大変似た構造を見出すことができる。因果関係についての外在主義者の一部——いわゆる規則性説 (regularity theory) を支持する者——は次のように主張する。すなわち、因果関係の事実、その関係項のローカルな事態ではないところで継起すること、特に広域の規則性やパターン、あるいは恒常的连接 (constant conjunction) に部分的に依存する。たとえば、ある方向に移動するビリヤードボール w が他の方向に移動するビリヤードボール z にぶつかるるとそれぞれ進路を変える現象のうちに因果関係がありうるのは、ビリヤードボールどうしが衝突するという出来事タイプが、進路を変えるという出来事タイプに恒常的に接続されているからである。つまり、因果関係は非因果的な一般的事実なくして成立しない点において外在的なのである。同様に、同一性についても似たような立場——同一性についての規則性説——を掲げることができる。その立場とは、同一性の事実が関係項の対から外在的なもの、特に世界全体にわたる広範囲な規則性に依存すると主張するものである。因果関係が特定の出来事間の関係だけではなく、出来事タイプの間の恒常的连接という一般的な事実を要求するように、同一性も対象のタイプの間の広範囲な規則性といった一般的な事実に依存するがゆえに、同一性に関する命題を真にするものは、その関係項の順序対だけでは不十分なのである。たとえば、宵の明星と明けの明星を同一だというために必要なのは、内在主義者が主張するようにそれらの内在的性質とそれらの間に成立す

る内在の関係だけではないと外在主義者なら言うだろう。彼女によれば、実際は惑星というタイプについての世界全体にわたる広範囲な規則性もまた必要なのである。つまり対象の間に成立する同一性は、規則性といった一般的事実に依存せねばならない。

同一性についての外在主義者はさらに進んで、規則性を自然法則と結び付けるかもしれない。これは、同一性を法則的な規則性(lawlike regularity)として扱う立場である。たとえば、金星はどうして金星自身と同一なのだろうか。内在主義者が先送りせざるをえなかったこの問いに対して、規則性を自然法則とみなす同一性についての外在主義者なら答えることができる。それは、世界全体に成立する自然法則によって同一なのである。もしあらゆる対象がいま成立している自然法則とはまったく異なる法則に支配されていたとすれば、そのときでも同一性そのものを保持せねばならない根拠は何だろうか。自然法則の規則の正しさを前提としなければ、「すべてのものは自身と同一である」という主張は空虚である。同一性を関係項の間のローカルで内在的な関係とみなしがちなのは、ふだん我々が自然法則など参照せずとも多くの同一性を知ることができるからであるが、それは同一性そのものが法則的な規則性に依存しない証拠となるわけではない。因果関係に対するのと同様、直観はここではあまり当てにならないのである。

だが、このような同一性の外在主義に対して次のような反論がありうるだろう。すなわち、そのような規則性や自然法則といった一般的事実に依存する同一性は、つまるところ個別化(individuation)のことでしかないという反論である。同一性に関する命題の真にするものに規則性や自然法則が含まれると誤って考えてしまうのは、我々はどうのように対象を個別化するべきなのかという問題意識に駆られているからであり、この問いはおおよそ同一性から乖離するように見える。だが、急進的な——もっと言えば還元主義的な——外在主義者はこの反論に対し、次のように切り返す。すなわち、同一性は個別化に還元されねばならず、形而上学的な同一性を内在的な関係として、個別化と独立に扱うことこそドグマの根源なのである。内在的な同一性を消去して困ることなど何一つない。個々の対象について自然法則を前提とした個別化が我々によってなされている限り、同一性をそれでも内在的で非還元的なものとしておく必要はない

のである。さらに、こうした外在主義は、前節で登場した二十個の球ケースを排除できるという理論的利益も享受することができる。彼女は、同一性を何らかのもので基礎づけることを述べる主張にコミットすることなく、それが馬鹿げたケースであることを、対象のタイプの間に成立する一般的事実に関する自然法則によって説明する。つまり、何らかの規則性や自然法則を前提とした個別化こそが、私の机の上には二十個の球ではなく、一つの球しかないことを保証してくれるのである。因果関係との類比を参考にするなら、同一性はかくして——ここで検討したのは同一性についての外在主義のほんの一部にすぎないが——規則性といった関係項の内在的性質や内在的關係からは時空的に遠く離れた外在的な存在に依存しうるので、外在的關係たりうるのである。

そのため、同一性に関する問題は、それが外在的である可能性を残している以上、直観的には内在的と思われる同一性が本当にそうであるのかそれとも外在的なのか定まらないという点にある。これは、同一性がそれほど単純な関係ではないこと、また同一性についての命題に対する真にするものとして何が必要なかも明らかではないことを示唆している。さらに、ここで前節の最後に残したままの問い——同一性は外的関係なのかどうか——に戻れば、その問いに対してもこれまでの議論に従えば、明確な答えを与えることができない。換言すれば、同一性が外的かどうか、すなわちそれ自身で存在論的に重要な関係かどうかもまた明らかではないのである¹⁷。普段何気なく用いられている同一性は、以上のようにいくつかの問題を抱えていることがわかる。

5. 結論

これまでの議論を最後に整理しておこう。

まず、内在的な性質を共有するにもかかわらず同一でない二つの球が存在する可能性を認めるならば、同一性は内的な関係ではないと考えられる。次に、同一性が内在的かどうかについては、内在的と考える理由に説明を与えるのが困難なことにくわえて、同一性の「仲間」が外在的でありうることから、外在的關係としての同一性の可能性が示唆される。さらに、その示唆を因果関係のケースと類比的に捉えるなら、同一性の外在主義はある理論的利益をもたらしてく

れるように見える。それゆえ、同一性を内在的關係とみなす直観に即した立場と外在的關係とみなす急進的な立場は、どちらも有効な選択肢であり、同一性が内在的か外在的のどちらであるかは明らかではないのである。その結果、同一性が内的でも外的でもないのか、それとも外的のどちらであるかもまた明らかではないということが導かれる。

さて、以上の議論から明らかになった点は以下の三つである。

- (1) 同一性は内的關係ではない。
- (2) 同一性が内在的な關係かどうかは明らかではない。
- (3) 同一性が外的な關係(存在論的に重要な關係)かどうかは明らかではない。

同一性の諸問題は、これら三つが互いに絡まり合って提起される。したがって、「(...)同一性に関する深刻な哲学的パズルが、本当に存在するなどということはありそうもない。 (...)『同一性』の名が冠されたパズルはきっと、他の何かについてのパズルなのである。」¹⁸とホーソンが述べる時、私はそれに同意しかねる。本稿で私が示したのは、同一性がそれ自身において、いくつかの問題を抱えている関係だということである。もちろん、そうした問題提起は多くの点で言葉足らずで、あまりにも突飛なものとも映るかもしれない。さらに、本稿で私はこれらの帰結が具体的にどういったことを示唆するのかも検討できなかった。しかし、(2)と(3)といった問題が残る限り、同一性は決して一筋縄な関係ではないことが理解されると思う。つまり、同一性は見かけほどには単純ではないのである。

註

- ¹ これら三つの特徴は互いに密接に関わるため、どれか一つを拒否することは、他の二つにも何らかの修正を加えねばならないことを意味する。たとえば、相対的同一性(relative identity)を擁護する者は、三つ目を拒否する(正確には改訂する)ため、同一性の推移性などについても黙っていることはできない。ただし、本稿ではこうした特殊な同一性についての検討は行わない。
- ² Lewis (1983), p. 356, fn. 16; Lewis(1986), p. 62; Langton and Lewis(1999), p. 343 を見よ。

(i) と (ii) は、ルイスによる独自の定義というよりは、主にラッセル以降議論されてきた伝統的な関係の分類を整理したものである。

³ *Ibid.*, p. 26.

- ⁴ ここでのスーパーヴィーニエンスは、大域的な (global) スーパーヴィーニエンスではないことを断っておく。その理由とは、もし同一性を内在的な性質に大域的にスーパーヴィーンするとみなすと、サイダーが指摘するように「いかなる一対一の関数も $\{=\}$ の同型写像である」(Sider(1999), pp. 922f) ために、そのスーパーヴィーニエンスがトリヴィアルに真になってしまうからである。これはさらに、同一性が内在的な性質に限らず、いかなる性質の集合にも大域的にスーパーヴィーンしてしまうことを意味する。つまり、同一性と大域的なスーパーヴィーニエンスは「相性が悪い」のである。もちろん、そこで大域的なスーパーヴィーニエンスの定式化そのものに疑問を投げかけることは可能だが、本稿では以上の理由から大域的なスーパーヴィーニエンスを扱わない。
- ⁵ 同一性の内在的性質へのスーパーヴィーニエンスが持つ哲学的な含意について記しておきたい。キムによる弱いスーパーヴィーニエンスの定式化を参考にすれば (Kim (1984), pp. 163f を見よ)、同一性とその関係項の内在的性質それぞれにスーパーヴィーニエンスすることは、次のように表現できる (P は内在的性質の集合で、 n は 1 以上の数とする)。

$$(I) \quad \square (\forall x \forall y (x = y \rightarrow \exists P_1 \in P \dots \exists P_n \in P (P_1(x) \& P_1(y) \& \dots \& P_n(x) \& P_n(y) \& \forall w \forall z (P_1(w) \& P_1(z) \& \dots \& P_n(w) \& P_n(z) \rightarrow w = z))))$$

これは次のことを述べている。すなわち、必然的に、あらゆる x と y について、もし x と y が同一ならば、そのとき次のような P の要素である性質 $P_1 \dots P_n$ が存在する。すなわち、 x が P_1 であり、かつ y が P_1 であり、かつ $\dots x$ が P_n であり、かつ y が P_n であり、かつあらゆる w と z についても、もし w が P_1 であり、かつ z が P_1 であり、かつ $\dots w$ が P_n であり、かつ z が P_n であるならば、 w と z は同一である。

次に、内在的性質の集合の要素である性質をすべて、つまり n 個共有している球 a と b が存在する可能性を考えよう。本文中でも触れられたこの可能性は、次のように表現できる (P_n^* は具体的な内在的な性質とする)。

$$(II) \quad (CE) \diamond (a \neq b \& P_1^*(a) \& P_1^*(b) \& \dots \& P_n^*(a) \& P_n^*(b))$$

問題は、この (CE) が (I) に対する反例となっているとともに、次の二階に量化される性質のドメインが内在的性質に限定された不可識別者同一の原理 (Principle of the Identity of Indiscernibles) に対する反例ともなっていることである。

$$(III) \quad (PII) \square (\forall x \forall y (\forall P (P(x) \leftrightarrow P(y)) \rightarrow x = y))$$

この (PII) は、内在的性質を共有する対象は同一でなければならないことを要求するが、ロドリゲス=ペレイラが指摘するように、不可識別者同一の原理のこうした解釈は、性質のドメインを純粋な (pure) 性質やあらゆる性質に制限するように解釈された原理と比べて「最も強いバージョン」(Rodríguez-Pereyra (2006), p. 206) である。内在的性質をすべて共有していても、外在的性質などによって同一でない対象は存在しうるだろう。したがって、(PII) および (I) はおなじことを主張するわけではないが——(PII)

はいかなる内在的性質もまったく共有し(もしくは性質自体を持た)ない個体においても成り立つが、(I)は、スーパーヴィーニエンスの依存性(dependency)や共変性(variance)からしてそういった可能性を最初から除外しなければならない——(CE)を排除してしまう点において、両者は通底している。

もちろん、だからといって(PII)や(I)がすぐさま誤りだというわけではない。性質の束理論(bundle theory)、特に個体を内在的性質の束に過ぎないとみなすような、非常に強い立場を採用すれば、(CE)の可能性をはじめから排除できるので、(PII)と(I)をもとに保持することができるかもしれない。本文中で触れた「何らかの形而上学的立場」とは、この内在的性質の束理論のことである。

だが、このような立場を支持する者を私は知らないし(ライブニッツをその候補としてよいのか私にはわからない)、性質の束論者の多くもそこまでのコミットメントを持たたくないだろう。ゆえに、(PII)と(I)は誤りではないにしても、非常に疑問の余地があることを述べているのである。

以上の議論は、同一性が内的な関係であること、すなわち(I)を主張することがいかに疑わしいものであるかを示すとともに、形而上学において問題とされてきた不可識別者同一の原理——といっても、その中でもかなり強い解釈が施された原理なのだが——に対する反例への態度と(I)の正否が密接に関係していることを示している。かくして、同一性の内在的性質へのスーパーヴィーニエンスが持つ哲学的な含意が、あまりに強いものだということは明らかになったと思われる。また、本稿の議論とはまったく毛色が違うが、ウィギンズも同一性が他の性質や関係にスーパーヴィーンしない根拠として、不可識別者同一の原理への反例をあげていることは示唆的である(Wiggins (2001), pp. 187fを見よ)。

6. ロウは「内的な関係の典型例は、同一性(identity)と差異性である」(Lowe(2006), p. 59)と述べているが、本稿の結論によればこれはあまりに強い主張をしていることになる。ただし、彼は自己同一性と同一性を区別していないようなので(*ibid.*, p. 49を見よ)、同一性を関係とみなした本稿とはそもそも扱っている同一性が異なっている可能性がある。
7. Armstrong(1989), p. 56. もしくは「存在者の追加なし(no addition of being)」(Armstrong(1997), p. 117)と呼んでもよい。
8. *Ibid.*, p. 87.
9. この第一の提案を支持しうる者として、たとえばアダムズをあげることができるかもしれない(Adams(1979)を見よ)。もちろん、アダムズ自身は同一性は内在的な関係だと主張しているわけではないし、その根拠としてこのものを性を直接あげるわけでもない。だが、彼が同一性を説明する性質としてこのものを性を念頭においているのは確かである。なお、アダムズは二種類のこのものを区別しているが、本稿では特に区別せずに「このもの性」を用いる。
10. とはいえ、具体者(concreta)の個別化の際にこのもの性によってその多様性を分析するのが、手に入るあらゆる説明の中でも最も優れていると主張する者もいるので(Rosenkrantz(1993), pp. 130ffを見よ)、このものを性を擁護すること自体にはそれほど問題は無い。重要なのは、このものを性を全面的に認めるわけにはいかない以上、他の選択肢を排除しないことである。
11. この第二の提案を支持しうる者として、たとえばハウリーをあげることができるかもしれない(Hawley(2009)を見よ)。アダムズ同様、ハウリーも本稿の議論に直接的にコミットしているわけではないが、彼女の次の言葉は第二の提案と近いと見ることも可

- 能だろう。すなわち、「(...) どれが a でどれが b であることを、何が定めるのだろうか。前提によって、 a もしくは b のいずれかの質的な特徴はこの役割を果たさないが、それでも a は a であり、 b はそうではないので、我々は根拠を持たない事実、つまり『同一性の事実 (identity fact)』と理にかなって呼ばれうる事実を持っているように思われる。何か他の点で異なるのではなく、その二つの対象はそれらがそれらの対象である点で異なっているのである。」(ibid., p. 117)
12. Della Rocca (2005), pp. 486ff.
13. もちろん、他の原理や主張を受け入れることで二十個の球ケースは排除できる。たとえば、外在的なものは含まぬよう解釈された不可識別者同一の原理を受け入れることで同一性を性質によって基礎づけることは可能であるし、また二つ以上の対象はおなじ時空領域に占めてはならないといった主張を受け入れることで、同一性を時空的関係によって基礎づけることも可能である。だが、これらの立場はかりに同一性の内在性を保持することができたとしても、同一性をプリミティブな関係とする立場同様、議論の余地がある原理や主張であろう。紙幅の都合上、これらを十分に検討できないのが残念である。
14. この例は、パーフィットによる (Parfit (1984), pp. 254f を見よ)。なお、ここでは議論を簡潔にするため、人格の同一性の必要十分条件を心理的な連続性であるとみなしておくが、その恣意性は私が主張したいことを妨げるものではない。
15. 人格の同一性に関する内在主義を保ちながら、いまの問題へ対処するためには、主に二通りのやり方がある。一つは、 x と y のみの原理 (Only x and y principle)——「いったん、どの事物が a であり b であるかははっきりさせれば、(...) a の b との同一性は、厳密に a と b それら自体の間の問題でなければならない」(Wiggins (2001), p. 96)——の提唱者であるウィギンズのように、人格の同一性の内在性を保持するために、分割の可能性自体を拒否するやり方である (Wiggins (2001), ch. 7 を見よ)。彼によれば、私は脳を分割された時点で、人格の通時的同一性を失うとされる。しかし、この対処法だと私の脳の半分が移植されるだけでも私は生き続けられる可能性を排除してしまう。ゆえに、このやり方は受け入れがたい。
- もう一つの対処法は、ヌーナンによるものである (Noonan (1985) を見よ)。彼によれば、脳分割以前の一つの身体は私と A 、 B の三つの人格によって占められていたとされる。分割前に一つ以上の人格が占めることを認めてしまえば、人格の同一性が内在的であることを否定することなく、いまの事態を明瞭に説明することができるだろう。しかし、問題はその対処法の犠牲である。一つ以上の人格が一つの身体を占めるという考えは、人格の概念を歪てしまうおそれがある。異なる二つの人格がおなじ時空領域を占めることは可能だろうか。私にはその答えがわからないが、少なくともこの懸念は決して無視できるものではない。したがって、人格の同一性の内在主義はいずれも——ここでは二つしか検討していないが——何らかの犠牲を伴わずして、分割前に私に何が起こったのかを明らかにする、もしくは私と A が同一だと言えなくなる事態を説明することはできないのである。
16. Nozick (1981), pp. 36f を見よ。なお、ここでは最近接続者理論のローカルなバージョンと大域的なバージョンを区別しない。
17. もし同一性という関係が存在論的に重要な関係かどうか明らかではないとすれば、同一性を消去しようとする者たちに対して何らかの影響があるかもしれない (Wittgenstein (1922), 5.531–532 を見よ)。だが、どのような影響があるのか私にはまだはっきりとしたことはわからない。

¹⁸ Hawthorne (2003), pp. 129f.

参考文献

- Adams, Robert M. (1979), "Primitive Thisness and Primitive Identity", *Journal of Philosophy* 76, 5-26.
- Armstrong, D. M. (1989), *Universals: An Opinionated Introduction*, Boulder (CO): Westveiw Press.
- (1997), *A World of States of Affairs*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Della Rocca, Michael. (2005), "Two Spheres, Twenty Spheres, and the Identity of Indiscernibles", *Pacific Philosophical Quarterly* 86, 480-92.
- Hawley, Katherine. (2009), "Identity and Indiscernibility", *Mind* 118, 101-19.
- Hawthorne, John. (2003), "Identity", in M. J. Loux and D. W. Zimmerman (eds.), *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford: Oxford University Press.
- Kim, Jaegwon. (1984), "Concepts of Supervenience", *Philosophy and Phenomenological Research* 45, 153-76.
- Langton, Rae and Lewis, David. (1999), "Defining 'Intrinsic'", *Philosophy and Phenomenological Research* 58, 333-45.
- Lewis, David. (1983), "New Work for a Theory of Universals", *Australasian Journal of Philosophy* 61, 343-77.
- (1986), *On the Plurality of Worlds*, Oxford: Blackwell.
- Lowe, E. J. (2006), *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford: Clarendon Press.
- Noonan, Harold. (1985), "The Closest Continuer Theory of Identity", *Inquiry* 28, 195-229.
- Nozick, Robert. (1981), *Philosophical Explanations*, Cambridge (MA): Harvard University Press.
- Parfit, Derek. (1984), *Reasons and Persons*, Oxford: Clarendon Press.
- Rodríguez-Pereyra, Gonzalo. (2006), "How Not to Trivialize the Identity of Indiscernibility", in P. F. Strawson and A. Chakrabarti (eds.), *Universals*,

- Concepts and Qualities: New Essays on the Meanig of Predicates*, Aldershot: Ashgate.
- Rosenkrantz, Gary S. (1993), *Haecceity: An Ontological Essay*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Sider, Theodore. (1999), “Global Supervenience and Identity across Times and Worlds”, *Philosophy and Phenomenological Research* 59, 913-37.
- Wiggins, David. (2001), *Sameness and Substance Renewed*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wittgenstein, Ludwig. (1922), *Tractaus Logico-Philosophicus*, London: Routledge.